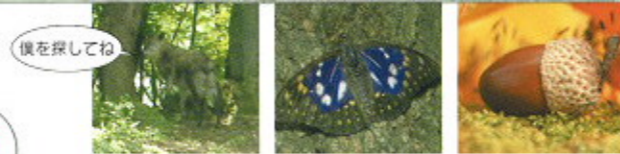


長谷堂城跡公園

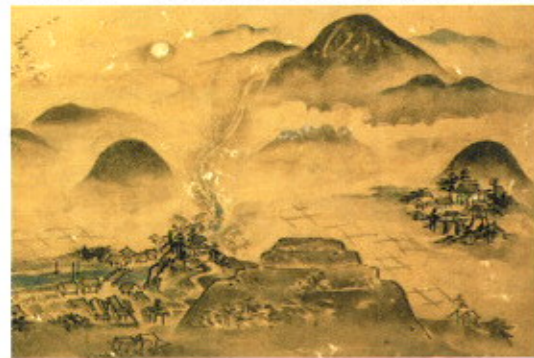


難攻不落の長谷堂城

長谷堂城が初めて記録に姿を現すのは1514年の伊達氏との抗争中ですが、堅城として歴史に名を残すのは、1600年の出羽の関ヶ原と呼ばれる長谷堂合戦においてです。

長谷堂城は南北約670m、東西約400mの小規模な独立丘陵に作られていますが、主郭である頂上から城内各所への見通しがよく、主郭を頂点とした統一的な指揮命令系統を組織できる抜群の名城です。山腹には、曲輪や横矢掛り、切岸、土塁・堀などの防御施設が効果的に配置されており、巧妙に敵の侵入を防ぐ構造となっています。山を登ってみると、直江軍の侵攻を半月にわたり食い止めることの出来た、いかに堅い城であったかが実感できるでしょう。合戦の後は、平地に御殿をつくったといわれ、統治のための城郭へと移行していったと考えられています。

■明和三年(1776)長谷堂村周辺絵図 (個人蔵)



左は、江戸時代中期に描かれた長谷堂城周辺の絵図です。中央下の丘陵が長谷堂城跡ですが、当時、樹木はほとんどありませんでした。山城として使う場合、見通しが悪くまた燃やされる危険があったので、樹木は取り払われていたのです。表紙の現在の航空写真と比べてみてください。また航空写真右上にみえる丘陵が出羽合戦の時に、直江兼続が本陣を構えたといわれる菅沢丘陵です。

表紙の現在の航空写真と比べてみてください。また航空写真右上にみえる丘陵が出羽合戦の時に、直江兼続が本陣を構えたといわれる菅沢丘陵です。

上杉侵攻経路



上杉軍は、直江兼続の本拠の米沢方面のほか、当時上杉領だった庄内方面からも最上領目指して侵攻しました。対して最上義光が支城の多くで明け逃げを行い、戦力を集中させています。明け逃げとは、城を放棄して人的損失を少なくするとともに、村落や耕作地を荒らされるのを防ぐ方法です。

交通アクセス



貴重な動植物の数々

本公園の植生は、江戸時代の絵図によると、当時、樹木は生えていませんでした。今から50年ほど前の写真にも、八幡神社と長谷堂観音の境内林以外には、ほとんど樹木は写っていませんが、春日神社のシダレザクラ、阿弥陀堂(慈眼庵)のアズマシクナゲ等は存在していたとみられます。その後、城山は振り返られることなく放置され、山は荒れてしまいました。

そこで地域が中心となって新しい里山「花の名所」にしようと、ここにサクラ等の花木を植栽し、自生するヒガンバナやシャガなどの保護・育成を続けています。

小規模ながら豊かな自然に恵まれた城山にはカモシカが出没し、ドングリやクルミの実をつける樹木の多い山中ではリスが駆け回っています。また、林内には食樹木エゾエノキが多いので国蝶オオムラサキが生息しているとみられています。

最上義光について知りたい方は!

最上義光歴史館へ!!



兜の他にも、「長谷堂合戦図屏風」や「最上義光書状」、また文化人・教養人としても評価されていた義光が詠んだ「最上義光等連歌巻」、菩提寺である光禅寺に寄進したと言われている「葡萄欄図屏風」など多くの資料が展示されています。

- 住所/山形市大手町1-53
- TEL/023-625-7101
- 開館時間/午前9時~午後4時30分
- 休館日/月曜(国民の祝日の場合は翌日休)、年末年始
- 入館無料
- ホームページ/http://mogamiyoshiaki.jp

三十八間総覆輪筋兜
最上義光が織田信長から拝領したと伝えられる兜です。前面が破損していますが、長谷堂合戦の際に、追撃する最上義光に対して直江軍の鉄砲隊が撃った銃弾が当たったためといわれています。



歴史と自然を体感!

長谷堂城跡公園 散策マップ



直江兼続 長谷堂合戦図屏風 最上義光 個人蔵

この屏風は江戸時代中期に秋田の学者戸部一愨齋正直が描いたといわれます。右隻には長谷堂城の攻防が描かれ、右手に長谷堂城主の志村伊豆守の出陣姿、左手に軍配を持つ直江兼続ほかの上杉軍精鋭が見えます。左隻には退却する上杉勢と追撃する最上軍が描かれ、中央に鉄の指揮棒をふるって猛追する最上義光、左手に鉄砲隊に守られた直江兼続が見えます。

